

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ケア理念を事務所に掲げている。いつでも目に見えるところに設置することで、立ち止まり考えることができる事をねらいとし、職員間での共通した意識を持っていられるようにしている。また、理念に少しでも近づけるよう、身近なところからの意識付にも努めている。	利用者がホームの生活の中で、理念「尊厳のあるその人らしい穏やかな生活」を実現していただく為に事務所に「宝寿の約束」と題してグループホームの利用者に特化した7項目のケアに関する約束事を掲げ職員間の意志の疎通を図り、日々、研鑽に努めています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所で行われる催し物だけではなく、こちらからも地域行事に参加し、定期交流が図れるよう取り組んでいる。	地域の社会・福祉に関連するインフラ(自治会、公民館等)へ職員が積極的に出向きホームでの諸行事へ参加の働きかけに努め、地域からも諸行事への参加の呼び掛けもいただき良い関係が保たれているようです	地域との良い関係は築かれていますので、更に事業所の存在を外部へ遠慮がちにならないよう発信出来ないかを感じました。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年々、地域への認知度は高まってきているが、事業所内で実践している支援等を地域の方々へ向けて生かすまでには至っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者御家族・民生委員・自治会長・地域包括支援センター職員等を招き、2ヶ月に1度開催している。こちらでの活動報告・予定を伝えていく中で、互いに意見交換が行えるようになってきており、今後のサービスに生かせるよう検討している。	運営推進会議は2ヶ月に1度、定期的を実施され、その議題もバランスのとれた良い内容になっています。会議でのQ&Aも非常に適切且つ具体性があり管理者・職員が共通した認識の上に、利用者各位に接している模様が丁寧な記録からも読み取れました。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事務連絡等においても、電話連絡だけではなく、可能な限り窓口へ出向き協力関係が築いていけるよう努めているが、まだまだ関係性が薄い部分もあり、今後についても積極的に取り組みたい。	市との諸関係は、支障をきたす様な案件もなく推移しています。また、地域密着型サービスの見地から運営規程や重要事項説明書等の見直しも早い8月からは生活保護者の受け入れ体制もでき、市の関係部所と協議出来る環境に有ります。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	物理的・身体的拘束だけではなく、心理的拘束などにも注意し、何気ない言動が拘束へと発展していかないように、職員同士、支援方法を確認し合いケアを行っていくよう取り組んでいる。また、資料を基に理解を深めていけるように、事務所内に用意している。	本件に関しては外部研修・施設内研修を通じて職員全員が良く理解していて、日頃、利用者各位に接するあらゆる事例をも具体的に確認しあって支援していました。その大切さは家族へも発信して、同じ目線で理解していただけるよう努めていました。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様、資料を作成している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	N0.6・7同様資料を作成し、情報を共有できるよう努めているが、身近な事例を基に学ぶ機会を設け、分かりやすくする工夫も必要であると考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に十分な説明を行うとともに、利用者・御家族の意見・想いに丁寧に対応し、不安を少しでも取り除けるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員に対しては、御家族対応表・なんでもノートを通し、御家族の面会時や電話連絡時の状況を記録、そららにより意見交換が行えるようにし、今後の運営に反映できるよう努めているが、外部に対して表せる機会については機会が少ない事が現状。	「御家族対応表」(なんでもノートと呼称)が置かれ、御家族のみならず来客や、電話受付の事項、傾聴した悩みや意見等、その日の事業所内の動きのすべてを、誰もがメモするようになっていて職員全員がその内容を共有し運営に反映しています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	少しでも顔を合わせ普段の様子を確認できるよう努めている。また、なんでもノートを通し、職員の想いや悩みを共有し、必要に応じて個別面談等も行っている。	運営に関する事項についても、日頃の細かな事項や提案は、自由に上記ノートに記入し、別の職員が意見を書いたりして機能しているようです。また、個人面接も随時行ない、運営母体・管理者・職員との関係は良好である事も職員とのヒアリングでも確認出来ました。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談だけではなく、普段の現場での様子もふまえた上で個々の特性を見極め、それぞれの良さを引き出していけるよう、定期的に個別評価をしていながら、やりがいのある環境がつかれるよう、整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人研修制度を設け、年齢・経験等も考慮したカリキュラムを作成し実践しているが、常に改善は必要である事を意識し、実践の中での課題点を抽出し見直しも行っている。また、研担当者自身のスキルアップも行えるよう、自己評価も定期的に行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修にも積極的に参加し、視野を広げられるよう努めている。また、事業所内においては役割を細分化を図り、それぞれに責任と自覚を持つことで、必要に応じて自発的に情報収集が行えるよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入前に、本人のこれまでの生活状況についての情報収集を行い、何が課題であるのか明確にしていきながら、マイナス面ばかりではなく、本人にとっての安心材料は何か探り、不安を少しでも取り除けるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事務的な説明ばかりを行うのではなく、御家族それぞれの状況や性格等を把握し、想いを打ち明けられるような雰囲気作りに努め、伝え方にも注意している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者本人と御家族の双方の想いにしっかり耳を傾け、早急に対応が必要なものと、時間をかけ支援していくものとを区別し、職員同士での情報交換もこまめに行いながら統一した対応できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「してあげる介護」ではなく、あくまでも主体は利用者であり、利用者の生活の場であることを理解し、共に暮らしていく事を様々な形で伝えていけるよう工夫している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	御家族と共に利用者の生活を支えていくことをきちんと理解し、また御家族にも協力して頂けるよう、常に利用者・御家族の立場になって考え、可能な限り想いを形にしていけるよう取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	『認知症の人だから』ではなく、「その人」として捉え、利用者がこれまで大切にしてきた場所や人との関係が保たれるよう、必要に応じ御家族にも協力を依頼している。また職員がフォローできる体制を作るなどして支援に努めているが、少なくともなりつつあるのが現状。	利用者個人の尊厳を重んじ、その人なりの思いが実現するよう支援する体制は出来ているようですが、利用者の高齢化が進むと同様、大切な場所や人との関係にも変化をきたしてきていて困難になってきているようです。そのような環境での各種、努力が見られました。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活の場である事で、それぞれの生活スタイルに戸惑いを感じている様子も見られるが、共に暮らしていく大切な人たちであることを繰り返し伝え、認め合い支え合える部分を見つけられるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	事業所でのイベント案内等を退去者御家族にも連絡をする、また季節の便りを送る等行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	様々な場面において、「この人にとってどうか」を考え、職員間で本人の様子を振り返り、気になる事があればノートに記入する等工夫している。	利用者が生活する環境や支援する事柄について、日頃から利用者一人ひとりの思いや何気ないしぐさをノートに記録されているので、職員全員が、この事が本人にとってどうか、御家族の思いはどうかの振り返りを行いながら支援に努めています。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生い立ちから入居に至るまでの生活歴をそれぞれの用紙にまとめてもらい、その状況を基に馴染みのある生活を継続し、これまでの生活とあまり大差のない生活が送れるよう取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式シートの活用、またはなんでもノートや毎日の記録に残し、こまめに確認していきながら、個々の生活パターンを把握していけるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	気になる事や、得られた情報について、それぞれのノートに書き留め、必要に応じて御家族と話し合えるよう検討し、こちらの一方的な捉え方や自己満足ではなく、現状を捉え御家族の想いを生かせる計画作成に努めている。	ノートに加えて、最近では毎日、利用者一人ひとりがその日を過ごしていただく為の計画表を作成し、その記録をまとめ、介護計画にも反映させ、その後のモニタリングにもスタッフが怠りなく参加して居るようです。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の何気ない言動を記録に残し、情報を共有していくことで、介護計画の見直しにも活かし、また継続した支援が行えるよう努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	目の前にいる利用者との向き合い何が必要であるかを考え、家族のその時の状況にも配慮し、様々な意見を取り入れていく事で物事を柔軟に考えていけるようにし、サービスの幅を広げていけるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源が有効活用できるよう、職員自身がその特性を理解し、利用者がここで暮らしている事を感じられるような形で伝えていく努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約時、かかりつけ医についての意向を伺い決定している。事業所協力医に変更される場合には、以前と変わらない医療が提供できるよう、協力医師、御家族と話し合いながら進めている。	かかりつけ医は入居時、本人・ご家族の意向を尊重して決めていただいているようですが、事業所の協力医が月1回の往診を含め、必要に応じての往診をして下さるので、殆どどの利用者のかかりつけ医は事業所の協力医のようです。事業所と協力医との良い関係が担保されていました。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護の視点から見る状況変化や気付きの中で、医療的範囲に関わる内容については医療ノートに書き残し、情報を共有できるようにしている。また、看護師との連携がスムーズに取れるよう医療支援担当者も配置し、情報経路の統一も図り、介護と医療のバランスが保たれるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時においては、病院関係者とスムーズに状況確認等行えるよう、こちらから病院へ出向き、直接話し合う機会を設けている。万が一入院した場合に備えての関係作りにまでは至っていない。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	緊急時の対応方法をあらかじめ確認していく中で、今後についての意向も一旦は確認させていただいている。また、利用者の身体状況に変化がある時には随時報告し、事業所で出来る範囲を十分に説明した上で、御家族と共に考え支援していくという姿勢を持ち取り組んでいる。	重度化や終末期に向けた支援については以前からの支援を更に改善し、御家族へは「意向確認書」により終末期に関する確認事項の説明と同意の署名をいただき事業所と御家族とが共に理解して、万全を期するよう努め、事業所職員の精神面のケアにも配慮すべき環境を整えつつありました。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	症状別対処方法のマニュアルを作成し、いつでも目で見て確認でき対応できるよう事務所に保管している。また、細かい部分に関してはその都度説明し、共通理解が得られるようにしているが、対応についての訓練を定期的に行うまでには至っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日頃からの意識を高めていくよう話し合っている。実際に災害時において課題となった部分に対し、身近な所から改善できる部分については改善し、その他、地域との協力体制が整えられるよう民生委員、自治会等に相談させていただいている。	大震災以降、災害に関する考え方も変わり、それなりに地域の方々の事業所に対する見守り方も変化しているようです。運営推進会議でも「自分達だけで何とかなるなど考えないで欲しい」と言って下さいます。事業所としても身近な所からお願いの輪を広げたいと地域に働きかけています。	昨今の事情から、お家族を招いての防災訓練を実施するなどして、参加者が感じていただいた事や意見を吸収し、ホームをより理解していただくことも必要と思います。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の性格や生き方を理解し、その方に合った言葉選び、関わりを行っている。こちらが上の立場であるような姿勢や、子供をあやすような対応になっていないか常に確認し合い、利用者は、人生の先輩である事を理解しケアに取り組んでいる。	事業所には個人カルテが作成されていて行動パターン、嗜好、特長、注意点など項目別に記入され、一人ひとりに接する時は、カルテの項目を良く理解し本人に寄り添うような気持ちで、必ず名前をお呼びして支援していました。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人のやりたい事や思いは可能な限り実現出来るよう努めている。また、もう歳だからとあきらめている部分や、わがままは言うてはいけないと思わせてしまわぬよう、こちらから誘ってみたりすることで、想いを大切にできることを感じられるよう取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	こちらの憶測や都合で判断するのではなく、利用者それぞれの1日の過ごし方を日頃から把握し、その日の本人の様子を感じ取りながら支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合った衣類を選び、いつまでも好きな物を身に着けられるよう支援している。起床時には必ず洗顔・整髪を支援する等、普段から身だしなみにも意識を持っているよう工夫している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	必ずしもやらなければいけない等といったプレッシャーを与えてしまうのではなく、「あなたがいてくれるから助かる」「ありがとう」という感謝の気持ちを常に伝え、個々の得意なことや、まだ残されている生活の知恵を最大限に引き出せるよう支援している。	職員の言葉遣いに至るまで細かく気を配り、各利用者のADLを最大限引き出すための努力が見られました。自分で出来る持ち場をよく理解して積極的に働いて下さる利用者の方々もいます。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	規則的な時間帯や栄養バランスばかりに捉われるのではなく、本人の状況を見ながら食べなくなる、飲みたくなるような声かけや関わりを探り、個々のタイミングに合わせた支援が行えるよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々の身体状況や口腔状態に合わせた支援を行っている。ただ口腔ケアを行うだけではなく、口腔内の清潔保持が味覚や気持ちの部分にどのような影響が考えられるか、職員自身がよく理解していく事にも意識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを確認していく上で、時間帯だけではなく、ふとした時の仕草や言動にも注意を向け、本人が尿意・便意を感じているタイミングを探りながら支援を行っている。それらを把握することで、精神的にも負担が少なく排泄が済ませるよう努めている。	本人に何気なく寄り添い自尊心を傷つけない見守りと支援を行うことで、利用者に応じた自立度の向上に役立てていました。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤だけに頼るのではなく、日頃からこまめな水分補給・腹部マッサージ等を行い、出来る限り自然排便が行えるよう支援している。また、個々の排便パターンを把握し、それぞれに合った対応が出来るようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	こちらの都合だけで決めてしまうのではなく、「お風呂に入りたい」と思えるような声かけや、入浴の時間が待ち遠しくなるような関わりを行えるよう努めている。	入浴については、日頃から本人の希望に沿った時間帯やタイミングにあわせて支援できるようにスタッフ一同、個人カードや日常、接する会話の中で各利用者を良く理解して効果ある対応していました。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	身体状況や夜間の睡眠状況に合わせ、日中においても休息の時間を設けている。常に同じ明るさの場所で過ごすのではなく、午前中は日の光をたくさん注ぎ、午後からは徐々にカーテンを閉めるなどして、入床への環境整備にも工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の服薬状況について看護師と共に確認し、状況変化を常に追えるよう努めている。また、新しい薬が処方されるなど何か変化がある場合、状況に応じて御家族にも連絡している。気になる事がある場合には主治医に必ず相談し、支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の好きなものを探り、共に楽しむ・喜び合う事で、これまでの生活と大差ない生活がここでも送られることを感じてもらえるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に合った見物がある所へ行けるよう企画を立てる、御家族の協力を得て配偶者等のお墓参りに行くなど、日常的とまではいかないが、可能な限り支援できるよう努めている。	外出については、まずは身近な所への機会を増やすことに努めていました。例えば、この季節なら地域で有名なコスモス畑での花摘みやその帰途の買い物など喜ばれていました。個人の希望に沿った近隣への外出も、随時、支援し、時にはお家族の協力を得ての支援も行っています。	散歩が可能な利用者には、寒くなる季節は無理ですが、暖くなる季節には緑豊かなホーム近辺の毎日の散歩なども外出支援の一環として可能ではないかと考えました。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物へ出かける際、支払い時には本人自らの手で現金が渡せるよう支援している。また、こちらできちんと預かっていることを伝え安心して頂けるよう、金銭出納帳等を確認してもらう事もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望と共に、御家族やご友人の方にも了解を得ていただき電話連絡等の支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	掃除機の音、野菜を切る音など、多少の生活音は必要ではあるが、職員の足音や声の大きさには十分注意を払い、不快になる音は避けるようにしている。また、室内温度設定や光の強さにも気を配り、居心地の良い空間作りに努めている。	施設内は大勢の利用者の生活の場では有りますが、共用空間でも、とても穏やかで、静かに時間が流れて行く雰囲気です。その中には季節を感じる写真や花が飾れ、利用者同士の会話や職員との会話も当事者以外の大勢には気になる事なく快適に過ごす事が出来ます。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同空間におけるテーブル席については、それぞれ座る位置を設定しており、ここが自分の居場所であることが感じられるようにしている。また、和室も活用し、のんびりと一人の時間を過ごせるよう支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居案内の際、居室で使用する家具や寝具等に関しては、なるべく使い慣れたものを持ってきていただくよう説明し、馴染みのある物に囲まれ安心できる環境作りに努めている。	各居室とも、利用者それぞれの生活歴を感じさせるような装飾や家具に囲まれ安心して住む事が出来るよう工夫されています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	段差をすべて取り除くのではなく、多少の段差を残しておくことで生活の中での筋力維持が図れるような作りとなっている。個人の食器類については手の届くところに置き、生活感を失くさないよう工夫している。		